

# 図書新聞

3579号

森田勝昭著『クジラ捕りが津波に遭ったとき——生業の人類学』(名古屋大学出版会)を読む

▼森田勝昭著『クジラ捕りが津波に遭ったとき——生業の人類学』11・15刊、四六判三七六頁・本体三二〇〇円・名古屋大学出版会

## クジラ捕りたちの「生きてあること」の意味とは

東日本大震災後の宮城県鮎川における小型捕鯨業の復興再生をめぐる人類学的思索の書

浜口尚



本書においては、東日本大震災が引き起こした大津波により壊滅的打撃を受けた宮城県石巻市(旧牡鹿町)鮎川に本拠を置く小型捕鯨会社の再建の過程における人間ドラマが聞き書きを中心にして描写されている。但し、それは単なる復興再生の民族誌ではない。著者はティム・インゴルドが主唱する人類学の実践をめぐしている。すなわち、「生きてあること」(being alive)の意味をフィールドにおいてそこで生活する人たちと共に考え、他者が突き付けてくる課題に主体的に関わ

っていく人類学の実践である。このような課題の下、捕鯨を生業とする地域景観の下に生まれ育ち、クジラ捕りとして暮らしてきた人たちが、大津波により生活基盤を破壊されながらも、自助と共助により、一からクジラ捕りとして生まれ直していくその過程が、観察者・記録者としてではなく、復興再生に向けて共に歩む一人の研究者(著者)もまた阪神・淡路大震災の被災者である①の「生きてあること」の思索として執筆されている。

本書では、震災の前年に入社した新米解剖事業員から解剖歴五〇年のベテラン事業員長、また捕鯨船の船長兼砲手から捕鯨会社の社長まで、様々な人生経験やクジラとの関わりをもつクジラ捕りたちの震災体験とその後が綴られている。いずれも興味深い生活史であるが、ここでは紙幅関係で二人を取り上げるの

こととめておく。一人目は南極海での捕鯨経験もある解剖歴五〇年の陸上班のリーダー、事業員長である。彼の復興は作業場が流されたあとの敷地内で泥や瓦礫の中から使い慣れた解剖用具を探し出し、拾い上げることから始まった。「絶対復興させる。だから毎日、オレ、このクジラの道具を探した。解剖用具ね。いろいろあんのさ。それ特製だから、どこにも売ってないものじゃないから。長年積み重ねてきた道具、いっばいあんのさ。[...]解剖用具の九五%はオレが拾った」(七〇頁)。

震災時に七〇歳であった彼の捕鯨への情念、執念が朴訥と語られている。二〇万頭にもぼるクジラを解剖することにより人生の大半を過ごしてきた二人のクジラ捕りの「生きてあること」、そのもの姿であった。

二人目は三五年の捕鯨歴をもつ震災時の捕鯨会社社長である。大手捕鯨会社系列の地元会社に入社後、和歌山県太地町や小笠原諸島にも駐在、

退社する捕鯨産業の下で転職や会社社会を経験し、その中でクジラ捕りとして生き残ってきた人物である。希望退職業構造をもつ組織の中で生き残ることは(それもトップとして)、筆舌に尽くし難い苦労があったはずである。「平成の十三年あたりかな。調査でニタリ捕る。イワシとる。そうなるから私たちが下がってきて。最後にアイヌランドのナガスで。(ツチは)昔の五分の二くらいじゃないですか。そのくらいの値段になってきて。どうしても飯食えない」(二六五頁)。「やるしかないでしょうね。従業員いるんだから。[...]鮎川からクジラとったら、他に商売とかなしいね。普通の漁師町になってしまいます」(二七八頁)。

クジラをめぐる国際関係や国の捕鯨政策に翻弄され、さらに震災により追い打ちをかけた小型捕鯨業者の呻きである。それでもクジラと共に生きてきた経営者はクジラを捕ることによって従業員に飯を食わせていかなければならないのである。著者によれば、ツチクジラ漁も調査捕鯨も極端な不漁が続いていた二〇一五年秋、社長は「最低の漁」「大変なシーズン」「今までで最低」(二八八頁)というような弱音を吐いた。それから数日後、社長はくも膜下出血により急逝した。震災後、血にじむような努力で捕鯨会社を再建してきたクジラ捕りの孤独な闘いは突然幕を閉じたのであった。

このあと社長の地位を受け継ぎ、新捕鯨船を竣工させたもう一人のクジラ捕り(震災時の課長)の苦闘の物語が続くが、その話は本書で読んでいただきたい。

著者は調査開始前、かつてミルトン・M・R・フリーマンらが鮎川において存在していることを明らかにした鯨肉の儀礼的分配などの非商業的転換が鮎川のクジラ捕りたちにもどのような影響を与えたのだろうか。著者はぜひ続編を執筆してもらいたい。(園田学園女子大学短期大学部名誉教授)

海鳴社、一九八九年)、震災後も存続していることを再発見できれば、自らの業績になると考えていた。しかしながら、五年間クジラ捕りたちと共に「生きてあること」の意味を考え続けたのちの結論は、鮎川における捕鯨とは地域景観の下で育まれてきた生業という単純な事実の再確認であった。

個人としてのクジラ捕りたちは「捕鯨文化」を創造するためではなく、生きるためにクジラを捕り、お金を稼いでいるのである。小型捕鯨業者(経営者)は従業員的生活を保障し、彼ら(彼女ら)を地域景観の中で生き残らせるためにクジラとの多様な関係を維持しようと奮闘している。鮎川のクジラ捕りたちにとって、「生きてあること」とはクジラと関わり続けていくことなのである。

日本国政府は二〇一九年七月、排他的経済水域内での商業捕鯨を再開した。この政策転換が鮎川のクジラ捕りたちにもどのような影響を与えたのだろうか。著者はぜひ続編を執筆してもらいたい。